
異常で過負荷な臆病者

熱血バレー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異常で過負荷な臆病者

【Zコード】

N6296X

【作者名】

熱血バレー

【あらすじ】

神の手違いで死んだ主人公、二^{ふたご}子^こ樹^{じゅ}。証拠を隠すため転生させられたのは、めだかボックス??

二重人格である主人公は、果たしてどうなるのか?
(作者は、文才の欠片もないでござ承ください)

プロローグ 上(前書き)

まだ完結していないのが2つもあるのに投稿しました。
者はバカです。

この作

プロローグ 上

「 いじじせじじへ。」

眼鏡をかけた少年が目を覚ます。

「 いじは、真っ白で何もない世界だ。そして、少年の前に一人の男がいた。」

「 いじせじじかつて？ 現世と冥界の狭間さ。君は、さつき死んだ。」

「

「 ？ ？ ？」

「 死因は、交通事故。少女を助けようとしてね。」

少年は、思い出す。

数時間前

登校途中、居眠り運転のトラックが少女をはねようとした。少年は、なにを考えたのでもなく勝手に体を動かしていた。それで死んだ。
「 思い出したかい？ まー君が死んだのは僕の手違いでさ。君に「あのーあんた誰ですか？」は一次げ、無視すんな——。葬式始めんぞ。」

「 うめん、うめん僕は神さ。見習いだけど……。（何だ今の殺氣

?) 「

「神? ?」

「そう神だ。見習いだけビ・・・つで話続けていい?」

「じうわ、自称見習い紙わん。」

「紙じゃなくて神だから。後見習いを強調するな。」

「すみません。自称神さん(笑)」

「(笑)邪魔だよねー。もうここよ。つでさつきの続きね。」

「つまり、あなた神の手違いで死んだ俺を、証拠を隠すために転生されるってことだろ。」

「??(全部言われたよ。)御察しの通り。で、君たちのことを調べたけど、『めだかボックス』に転生してもらひよ。」

プロローグ 上(後書き)

プロローグなのに一話になりそうです。なんて、文才がないんだ。
ちなみに、二タ子っていう地名は実際にあるそうです。

プロローグ 下(前書き)

プロローグ 2 話題です。

プロローグ 下

「御察しの通り。で、君たちのことを調べたけど、『めだかボックス』に転生してもらひよ。」

「君たちってことは人格が一つあることに気づいたか。つま、死因を思い出したころから裏オレが出たな。あとこのことは、アイツには内緒だからな。あとめだかボックスの世界で原作ブレイクしてもいいのか。オレのためにも、アイツのためにも。」

「はー、わかつた。で、気づいているとは思つたが現世の時点であの子は、異常を持つてんね。」

「アイゲーム見稽古のことか?」

「それそれ。で、転生するに当たつてひとつプレゼントがあるんだ。」

「何だ、それは?」

- 「神からの贈り物 プレゼント
- ? お金の心配なし
- ? それぞれボクから異常と過負荷をプレゼント アブノーマル マイナス
- ? お互い5つまでお願ひOK
- ただし、? あなたは異常は持てない。逆も一緒。
- こんなもんでどうですか。」

「まあいい。で? はなんだ。オレにはせりせりせ過負荷だらうが。」

「君には、^{トレチャーティル・ナ・ノーグ}裏切りの樂園を、あの子には、^{アンコナント}憎まれ知らずをあげるよ。」

「面白い、じゃーそろそろ連れてってくれ。めだかボックスの世界へ。」

「OKー逝つてらっしゃい。」

「おい、字がちよ

さあ、第一の人生、スタートです。

プロローグ 下(後書き)

見稽古は、刀語の鏑七実を参考にしました。

また、裏切りの楽園は、Paradise Lost

のサビから

とりました。

両方大好きです。

そして、最後に

プロローグ長！！

登場人物紹介

二タ子樹 ふたこいつき 表人格

性別 男

見た目 そこそこイケメン。というより女顔。

いつも眼鏡をかけている。髪は、基本黒。

一人称 ボク

年齢 16歳

好きなこと、もの 人助けをしている人

野菜

嫌いなこと、もの 人が傷つくこと

動物（魚も含む）

臆病者（自分）

肉

見稽古 アイゲーム 異常 アブノーマル

見た

だけで、相手の異常や過負荷を使うことができる。また、それと同時に、弱点も見極められる。ただし、最初の1回は、50%しか使うことができず、異常や過負荷自体を無効にすることはできない。現世で、すでに使っており、皆から恐れられていた。

憎まれ知らず
アンリセント

神に転生するときにもらつた。どんな動物にも敵視されない。ただし、人間には無効。また、自分は過負荷の対象にされない。これは、ON、OFFの切り替えができる。

二タ子樹
ふたごいづき
裏人格

性別 男

見た目 表とそく変わらない。ただし、少し目がつり上がる。
眼鏡はかけていない。髪は、基本白。

一人称 オレ

好きなこと、もの 人を傷つけること
人を貶すこと

肉

表人格

嫌いなこと、もの 偽善者

ナルシスト（誰のことかお分かりですね）

敬語

野菜

過負荷
マイナス
トレチャリーテイル・ナ・ノーグ
裏切りの楽園

異常のみ、相手から奪い使うこともできる。これも、ON、OFF 可能。また、無効にできない代わりに、奪った異常は200%使う

ことができる。これは、安心院さんにも有効。せりて、人も操ることができる。（1人だけ）

まーこんな感じです。また、異常や過負荷は増やしていくので、ある程度たまつたら能力のみ紹介したいと思います。

登場人物紹介（後書き）

質問があつたのですが「裏切りの楽園」では、基本能力強化のつもりです。ただ、めだかの完成は「無限ループ」になるため不可能。また、宗形の「殺人衝動」等の異常はそのまま（100%）コピーにします。

作者の説明不足です。まことにすいません。

オレからボクへ（前書き）

ついで、転生しました。

オレからボクへ

「 いじは、どいじだ？」

一タ子樹は、ベットで寝かされていた。そして、机の上には、置手紙が。

「 何だ、これ？」

『 いれを読んでいることは無事転生できたんだね。もし君が裏人格なら頼みがあるんだ。机の下に表人格用の手紙があるからこの手紙を読み終わつたら、その手紙を机の上においてほしい。つまり、裏人格用の手紙を読む その手紙を抹消 机の下の表人格用の手紙を見つける 机の上に置く、つてわけだ。何でこんなことをするのかというと、この世界にまだ裏^{キミ}人格は、存在してはいけないんだ。でも大丈夫。いつか君も原作世界にいてもよくなるから。まーそんなわけで当分君は登場しないでね。それじゃーバイバイ。』

b y 神

「 何の予告もなしにオレをこの世界に連れてきやがつて、それで、この手紙か。まったく世間知らずもほどがある。（オレがいえないが）まあいい。オレは、少し寝るか。」

オレからボクへ（後書き）

最後に、

裏人格「ここは、どこだ？」

神「もちろん、箱庭総合病院ですよ。」

表人格「つ、ついに来たー。」

ちょっとキャラ壊れました（笑）

スタート 第2の人生（前書き）

「話続けて短いですねー。」

あと、樹の顔を女顔にしました。でも男に代わりはありませんよ。

スタート 第2の人生

「「」は、？」

一タ子樹は、ベットで寝かされていた。そして、机の上には、置手紙が。

「何、これ？」

『これを読んでいるということは、無事転生できたんだね。真っ白な世界でも会つたと思うけど覚えていいかい？ボクは、神さ。で、君はボクの手違いで死んでしまつたんだ。だから君にはめだかボックスの世界に転生してもらつたんだ。突然の話で驚いているかも知れないけど君の好きな漫画なんだからいいでしょ。この世界では、原作ブレイクしてもいいし、異常も使っていいよ。ちなみに君の持つていてる異常は見稽古と憎まれ知らずなんだけど分からなかつたら第3話を見てね。あと、そろそろ君とのところに善吉君が来ると思うよ。その後、めだかちゃんにも会い、善吉君の名言が出るといね。じゃ、バイバイ。

by 神

「「」が、めだかボックスの世界？あつ、善吉だ。」

「僕は人吉善吉。君の名前は？一緒に遊ぼうよー！」

こうして、ボクの第2の人生が始まった。そして、15歳の春、旧友人吉善吉と1年1組で再会を果たす。

スタート 第2の人生（後書き）

善吉の名言の意味は分かりますよね。ちなみに、病院でめだかや襷、飛沫達にも会つていて、病院は今でも残っています。原作ブレイク出たーー！！

また過去については、番外編としてやっていこうと思っています。

人間は忘れる生き物だ、とよく言つけど忘れられた人間の気持ちを考えた」と

サブタイトルは、いつもこんな感じにしたいと思います。

人間は忘れる生き物だ、とよく言つけど忘れられた人間の気持ちを考えたこと

15歳の春を迎えた僕は、今日もまた校門をくぐつていた。そして、常常思つてゐる。箱庭学園でか！！

つで、今日は、異常な女が人の上に立つ日だ。そう、今日は新生徒会長発表日。

新生徒会長の黒神めだかが全校生徒の前で演説を始める。

「世界は平凡か？」

異議なし。

「未来は退屈か？」

たぶんそーじゃない。

「現実は適当か？」

Y e s o f c o u r s e .

「安心しろ、それでも生きることは劇的だ！」

安心なんかできっこない。ボクなんか毎日毎日恐怖の連續だ。

「そんなわけで本日よりこの私が、貴様達の生徒会長だ！」

今までの前置きは必要でしたか？

「学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで、悩み事があれば迷わず田安箱に投書するがよい。」

悩み事は、いえないからこそ悩み事なんだよ。

「24時間365日、私は誰からの相談でも受け付ける。」

それは、ストーカーにまで発展する。

つてなわけで、めだかちゃんの発言に一言ずつ文句を言ってみた。でもボクは、それを面と向かって言えない。そんな、ボク臆病者が嫌いだ。

ボクは、ボク臆病者を恨みながら一年1組へと向かう。

すると、原作と同じく善吉と一人の少女が話していた。言わずも知れたブラックホールの胃袋を持つ不火知である。

「しつかしあのお嬢様、全校生徒を前によくあんな啖呵が切れるもんだよ！人前に立つのに慣れてるつづかせー」

その女子の言葉に、そばにいた男は反論する。

「カツー！あれば人の前に立つのに慣れてるんじゃねーよー人の上に立つのに慣れてんだ！」

そんな会話を聞きながら、ある問題に直面した。なぜか、二人は、ボクの席のところで話しているのだ。せめて善吉とはもっと感動的

に再会したかつたが、仕方ない。

「ちよつとそここいですか？」

「あひじめんじめん、つてお前

（感動的ではないが、気づいてくれるだろ）。）

「どうかで俺と会つた？」

つな、完全に忘れられている。まーいつか。他人のふりにて気づいたら脅かそう。実質、2ヶ月しかあの病院にいなかつたし。

「えつ初対面のはずですが。」

「名前は？」

「これつて気づいてもひつチャンスだよね。つと、せつとね。」

「一タ子樹」

「えつ……」

驚いてるぞ善吉。やつと気づいたんだね。

「男だつたんだ。俺はつきり女だと思つてた。」

「私も、私も」

「これから、一緒にクラスだ。よろしく。」

「よろしく」

「よろしくお願いします。」

ショックだ。完全に忘れてる。これを若年性アルツハイマー病と言わざりなんと言つだらうか。

と、落ち込んでいるボクの横で善吉が「俺は生徒会には入らない。」なーんて言つてめだかちゃんに強制連行（笑）。ソレで、ボクにもうひとつの疑問が。

「あのーなんでボクまで強制連行なのでしょうか、生徒会長さん。」

「よそよそしい呼び方をするものでないぞ。世のようひめだかちゃん」と呼ぶがよい。一タ子同級生。いや、“樹”。

剣道二倍殴り言づかじ元がゼロの奴に向かつて血漬けと恥をかく 上

「あのーなんでボクまで強制連行なのでしょうか、生徒会長さん。

」

「よそよそしい呼び方をするものでないぞ。昔のようになめだかちやんと呼ぶがよい。二タ子同級生。いや、“樹”。

「おつお前生きてたのか。」

「いや、人を勝手に殺さないでくださいよ。でもなんで死んだことに?」

すると、一人が説明を始めた。

長かつたのでまとめるといふだ。

?病院破壊未遂の容疑者になる。（もつとも、飛沫達の“偉業”を阻止すべての罪を自分のせにとし、助けたため）

?転院指令を受ける。（いわば、追放）

?転院先は箱庭総合病院の末端施設であつたため、今まで以上の実験が行われるという話を聞く。

?一人は死んだと思い込む。

「、とこつわけだ。」

「でも生きててよかつたぜ。でも、なんでお前が1組なんだ? 1組でもおかしくないの?。あと・・・。」

「あと?」

「お前、こつからそのー、女らしくなったんだ。」

「善哉よ、まさか樹に恋したわけではあるないな。樹は、あくまで男だぞ。」

「あくまで、つづボクそんな女に見えますか?」

「「見える……。」「

(ハモつたつて)とせ・・・)

樹の頭の上に負のオーラが漂つ。

「そんな落ち込むでない、樹よ。」

「だから、ボクは正真正銘男ですよ。なのに、女だなんて。」

「だから、女だじやなくて女に見えると言つただけだぞ。(ここ)つの心つて昔から弱かつたつけ?」

「まーもういいです。で、1組にいる理由ですがまだ、理事長が気づいてないだけでたいした理由はありませんよ。」

「わかった。やっぱお前異常なんだな。でもこによ。」(つづ)

話と回じように話ができるのか。」

つで、話は進み、今ボクは剣道場の前にいる。

「あ？ 誰だお前ら。」

「1年13組 りよ。」

今後面倒なのでさつさと説明すると、不信任2%の人たち（門司先輩ら）にめだかが『上から目線性善説』を披露し、それk

「おい、樹。どこ見ておる。もううんお前も素振り千回だぞ。」

門司先輩方の悲鳴後に、剣道場にボクの叫びも響いた。

剣道三倍殴りで血脈元がゼロの口から血脈アリと睨をかく 上(後)

樹「まだここまで、よかつた。原作を読んでこるので」の展開も予測していた。だから耐えられた。でも次回、・・・。」

れあびつなりでしょ。」

剣道二倍殴つて言ひたが元がゼロの奴に向かつて血漬けのと恥をかく 下(説)

祝PV3000 & ユーチューブ

見た下さつた方々本当にありがとうございます。

今後も『異常で過負荷な臆病者と無礼者』をよろしくお願いします。

感想大大大募集中！！！

剣道二倍殴りで倒され元がゼロの奴に向かって血漬けの恥をかく

下

門司先輩方の悲鳴後に、剣道場にボクの叫びも響いた。

そして、めだかが倒れる。・・・。つておい！だれか突っ込んでほしいよね、口。あの異常の塊のような人が倒れたんだぞ。ボクの叫びで。

「すまない。ちょっとめまいがしてな。」数日頑張りすぎたな。

「おこ、その言葉、あなたがもつとも書いてはいけない言葉じゃん。（えつとー、まー原因はめまいなんだね。よかつた。）

というわけで、一件落着。とは、いかないのが現実の厳しさなんだよ。今日もまた、ボクは剣道場に来た。というより、善吉に誘われ、行ってみたらこの有様である。

「お前も来たのか。もちろん来たならそれなりのお礼をしなきゃいけねーよな。」

「お礼なんて結構です。では、ボクはこの辺で。」

「お、じゃーな。つとでも言つと思つたか？甘いんだよ。」

（あと少し、あと少しで門司先輩達が起き上がる。）

「田向君？なつなんでこんな風になつているの？まさそじを教え

てもらいたい。」「

「一生徒会長（バケモン女）に草むしりを頼んだんだけど、うまくいかなくてねー。だから変わりにボクが草むしりをしているんだ。」

「

「じゃー雑草、つて門司先輩のことなんですか？」

「もしかしたら。あ、でもこいつって時間稼ぎしても無駄だぞ。あの女、今頃役員募集演説の真っ最中だから。」「

（「」で、門司先輩の回想場面だな。いま、ボクは何を考えているのか？）

「ま、待てよ。勝手なこと吠えてんじゃねーよ。たつたいま思い出したわ。俺は昔剣道少年だったんだよーー！」

（え、キター。門司先輩かっこいい）

「うひざ。ドロップアウトした奴が簡単に改心して立ち直りうとしてんじゃねーよ。剣道三倍段つて知つてつか？ボクはあんたらの三倍強いつて意味だ。」

（「」で善吉が立ちあが……らないつておーーー。「」で原作ブレイクしちゃつてんじゃん。やっぱボクのせいかい。だったら）

「し、真剣白刃取りだと？」

「そういえば、さつき剣道三倍段つて白戻してたけど、初心者のボクには初心者になるの？ほり、〇×³=〇でしょ。それとも、実

力って意味だったの？ならボクがそのプライドを切り裂いてあげるよ。」

そして、門司先輩から木刀を借りる。（正式には、無許可だか）

「どいつもこいつも面倒くせー。お前剣道三倍段つて知つてつ、「面倒くさいのはあなたです。ホント、ボクが安心できるよ」静かにしてもらいますよ。」ツガ」

つてことで解決です。善吉は、ボクの声で驚いたらしくそれで目が覚めたそうです。

その後、日向君も、めだかに『上から目線性善説』を披露され、無事改心（？）したとわ。

っえ！樹、キャラ変わりすぎつて？あれは、門司先輩方を雑草扱いしている日向君にきれたからだよ。何が剣道三倍段だ。つと言つことを今日も言い出せず、胸に溜め込む臆病者ボクだった。

人に何かおじりでもらうとき、それなりのマナーというか程度を考えるべきだよ

樹「サブは、ボクの心の叫びです。」

有明先輩の話は、カットさせていただきます。本当にすいません。

人に何かあるかも知れぬが、それなりのマナーといふか程度を考えるべきだよ

「ここは、食道だ。」

「おい、字が違う！ 食堂だよ。ブラックホール不知火と一緒に。

なぜ、こうなったかと言つと・・・

「樹、お前も今から食堂へ行くところか？ もしそうなら、一緒に昼食を取ろうとしたときのことだ。いきなり、善吉が行こうぜ。」

「うん、いいよ。ところで、隣の人は？」

「あつ、こいつは、「不知火 半袖だよ」とつてことだ。」

「不知火ってことはまさか、理事長の孫ですか？（ま一知つてるけど）」

「うん、そうだよ。」

という訳で、ボクは今食堂にいる。でもなぜか一人つきりだ。善吉はトイレにいくと言いながら帰つてこない。

「あれ？ 善吉遅いね。善吉には樹に言うなつて言つてたけど言つちゃうね。今日、樹のおじりつてことだから。」

「えつ？今なんて？」

「だから、樹が今日の罰ゲームおこひらってことだから。」

「ぜ、善吉の裏切り者…………！」

「うして、ボクの財布から諭吉さんが一人旅立つていった。

「待つて、待つてくれー。諭吉殿。」

「何一人で言つてんの。馬つ鹿みたい！」

そのころ、神は

「皆さん、久しぶりの登場です。こう見えて、毎日樹のことはリアルタイムで観察しているからね。で、お金の問題なんだけど、電気代とかは、何とかなるけど現金はねー。月10万しか払えないから、おごりは残り9回しかできないね。ドンマーリ、樹。」

「ヘークションー！」

「樹、風邪引いたのか？」

「うるさい、裏切り者。善吉のせいで精神病にかかりそうだよ。夜もこれじゃー眠れないじゃないか。」

「有明先輩みたいなこと言つなよ。」

「なら善吉が言わせないよう、これ以上ぼくに精神的ダメージを

「えないので欲しいなー。」

「『めん。』

「まーいつか、じゃーね。また明日。」

「おひ、じゃーな。」

今日は、今日で散々な日だった。こんなときに、もしも、ボクの怒りを貰つたら、またキャラ崩壊しちゃうやう。あれ、今いたのは、

「貴様。王である俺の目の前を横切つて走つてよこと思つているのか?」

よし、君はボクの怒りを貰つてくれた。悪いけど、きょうは、そんなに安くないからね。

「もちろん。つーか、お前誰?まさか、自分で王様気取り?マジださ。ナルシストにも、程があるがあるや。お前のあつてもないに等しい脳みそで考える。カスごときの分際が。」

やつと、裏人格^{オレ}が登場か。

人に何かおじりもぢりとさ、それなりのマナーといふか程度を考えるべきだよ

やつと裏人格の登場です。やっぱ、現世でも相当嫌つてたからしかたない。

最後のセリフの中に一人の言葉が入っています。

だいだいオレは神だと天才だとこいつて奴に限つて実はたいしたことない

王士ファンの方々、申し訳ござりません。

祝PV5000、ユニーク1000

だいだいオレは神だとか天才だとかといつてる奴に限って実はたいしたことない

「もちろん。ってか、お前誰?まさか、自分で王様気取り?マジださ。ナルシストにも、程があるがあるぞ。お前のあつてもないに等しい脳みそで考える。カスごときの分際が。」

やつと、
裏人格が登場か。
オレ

「よからず、お前の質問に答えてやる。おれの姉前は、3年1組の都城王士だ。」

こいつって、人間扱いしなくていいよな。そうすればオレが殺つても罪にはならないしな。というより、マジ殺してー。だから、

「名前なんかどうでもいい。カスの名前など覚えるだけ無駄だ。」
「やまーみる。何ならもつといったぶつてやるわ。

「とにかく、オレの視界から失せろ。」

「王に対する態度か。よからず、王と愚民の違いを見せてもやるが。」

い、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、
きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、
い、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、
きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、
きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、
い、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、『平伏せ』きもい、
きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きも
い、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、
い、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、

「？？？——一度のオレの攻撃が効かないだと？」

(突つ込むのやになんだ。)

「とにかくわけだ。お前にまつたく同じことを言つてやるよ。王に
対してこの態度か。よからず、王と庶民の違いを見せてやるべ。」

「は、笑わせてくれる。お前」ときが、このお『跪け』ツグハ
！――な、何？？』

樹が『跪け』といつたとたん、自称王が、地面にめり込む。

「これでも、まだ手加減してやつたんだ。感謝しろ。あと、フラン
ス『計画』で、スペコン使いすぎだ、カス。」

「なぜお前がフランス『計画』のことを使へ？」

「やーな。今日の」と、理事長に話すとしてもできるだけ裏人格
は巻きこむなよ。」

「ふん、ならばお前の名前は？」

「一子樹、1年1組だ。」

「1組だと？？」

「悪いか？」

「いや、少しきに『平伏せ』ツグハ！－な、何－！」

だが、王士が前を見たとき、そこには誰もいなかつた。

「はー疲れた。これで、オレの恨みの1厘ほどは、果たせたな。
最後に、^{ツチ}アイツの驚く顔見たかつたなー。じゃ、そろそろ、選手交
代だ。」

樹の人格が元に戻る。

「あつ、あれ王士は、どこ行つたのかなー。まーボク、あん時怖
かつたしいつか。」

そのころ神

「よく考えれば、^{アイツ}裏人格も異常、元から持つてんじやん。」

だいだいオレは神だと天才だと云つて実はたいしたことない

異常紹介

選手交代 バトンタッチ

特定の人間と場所を入れ替えることができる。

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近づいてくる

樹「動物なんか一度と近づいて来るな。」

めだか「私のところには、なぜ動物が近づいてこないんだ？」

善吉「そんなんなら、足して二で割れ。」

樹&めだか「それができればこんな苦労はせんわ！……」

動物が好きなのに動物に怖がられでいる奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が

今日も、こつものよひにただただ普通に登校した。だから、今日はボクにとって毎日の始まりだとはまだ気付かない。

ボクは、今生徒会室にいる。理由は、い想像にお任せします。まー強いて言ひなら成り行き。そつ、成り行きでここにいる。そこへ、今日もあるの女がきた。

「今日も、依頼が来てるね。とにかく、樹は、何だ? その服装。

「これですか? ただ制服の下にジヤーンで、デビルカッケー。」

「

「善吉?」

「これ、めつちやカッケーじゃん。」

「さすが、善吉。この美的センスが分かるか。まさに時代の最先端つてやつだろ?」

「確かに」

「IJの服は、・・・」

五分後

「・・・、といつわけ何だよ。」

「確かに、デビルカッケー。」

「（私には、ただ時代についていてない気がするが。）ところで、二人とも。」

「「なに？」」

「今日の依頼だが、犬が迷子だそうだ。私が動物嫌いなことは二人も知つてあるだろう？だから、頼んだぞ。」

そして、目撃情報のあつた庭に三人は、向かう。えつ！一人多いつて？それは、なんでか不知火が、ついてきたからだ。

「善吉。犬はどこにいるんの？」

「え」と確か庭の近くで見たつていう目撃情報が・・・

「ん？」

まさか、あれが？（知つてるから憎まれ知らずはOFFにするけど）

「あの犬だね」

御察しの通り、ボクらの前には、犬なんかいなかつた。その代わ

りに、
腹をすかけた獰猛な犬モンスターがいた。

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

最後の文？字稼ぎのよいつで字稼ぎでない。いや、すいません。あれ
はもう字稼ぎです。

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

ちよつと、今日は長めです。

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

「あれは、犬じゃない。お願いです。今すぐ、セヒのバケモノを抹消してくれええええええええええ！」

「どうした、樹？つておい！何だあの犬は。^{モンスター}まさかと思うが、あれが迷子の犬か？」

「えうとえう。でも、あれは本当に犬なの？」

涙目のボクは、この時点で今日の運勢を悟っている。

「（あの、一クソ神（見習い）が。今度会つたら、この借りは返さないとなー（笑））」

そのころ神は、

「へクシコンーなんだか、ボクに対する、すさまじい殺意を感じる。」

「樹、どうしたの？目が怖いよ」

「いや、なんでもないよ。つで、この犬を早く捕まえてくれ、善^{モンスター}吉。」

「おい、オレに任せんなよ。て、めちゃくちゃ^{モンスター}犬機嫌悪そつだぞ。」

「

「さつきから、一人とも犬モンスターつて言つてゐけどあれはボルゾイとい
う犬だよー 別名ロシアンウルフバウンド」

「「ウルフって入つてんじやん！…！」

二人の息ぴつたり。と思つたとたん、

ガルルル！…！

鳴き声怖つ…！

「ほら『じひちにおこでよお兄ちゃん！一緒に遊ぼうよー』って
言つてるよ！」

「いや俺には『人間ども！今度俺の眠りを妨げたら噛み殺すぞ！
！…』って聞こえるね。」

「ボクには、『あの、善吉つて言つ人間と一殺し合い（遊び）た
い…』って聞こえる。」

「樹。オレは、今のお前を仲間と思つていゝのか？」

「うん。善吉は、今ボクの大切な団ながまだよ。」

「もういい。つで、本当にあいつ捕まえんのか？あきらかに死亡
フラグ立つてんだけど。不知火は手伝ってくれるんだよな。」

「え？あたしが？やだよ？あたしは親友のあんたが酷い目にあう

のを笑いながら見ていたいだけの人間なんだから」

「お前、本当に友達か?」

「もちろん。大切な道具だよ^{ともだち}」

「“ともだち”の字は何だよ…」

「捕まえにいくときに、これを持つていつて欲しいの」

そういうて不知火が取り出したのは…

「なるほど…」一つを餌付けに使うわけだな…！」

「んーんそ、うじやなくてさ…」これを腹に仕込んでね「ぎやあああ…内臓喰われた…！」と見せかけて実はソーセージでした」つていうギャグをやつてほしいの」

「そのギャグさあ、やつた2秒後にマジで食われるよな?これが、お前流道具の使い方か。」

「そうだよ」

「ひでえ。…くそつー行くしかねえか。不知火!そのソーセージ貸せ!」

「善吉。『行くしかねえか』じゃなくて、『逝くしかねえか』でしょ？」

「いや、まだオレの人生始まつたばかりだから。」

「安心して。君が死んでも、自殺扱いにしてもらつかう。」

「オレ、お前にそんな恨みを貰つた覚えがないが。」

『へえー覚えてないんだ。この前、不知火と3人で昼食をとりに行つたとき、ボクを裏切つたくせに。』

「な——！——あれは、すまなかつた。オレの財布も寂しかつたんだ。』「めん。」

『ボクの諭吉さん、どうしてくれるかなー。』

「わかつた、金払うから。』

『いいよ。それよりも早く善吉の死に様、見せてくれよ。』

「その後、善吉は、見事な死に様を披露して、旅立つて行つたのだな。』

「そういうことです、めだかちゃん。』

「おい、オレはまだ生きてるからー勝手に殺すな（まー死にかけたが）」

「つで、犬の確保は？」

「無理だつた。つていうか、あれは犬じやない。」

「でもいのせめじめますこと。近づいたら保健所が動き出すだろ」

「保健所だと？」

「確かに保健所行きつてのはかわいそうだな。よし一人とも行くぞ！」

「ダメだよ、善吉が死ぬのはいいけど、今度はボクまで死んじゃうよ。」

「ふむ。樹が死ぬのは困るな。」

「おい！一人とも、オレが死んでも困らないのか？」

「もぐらん（うん）」

卷之三

「いや、善吉。今で悲しむつて、血意識過剰するやうだ。」

バキッ！

「何の音だ？」

「善吉の心が折れたんだよ（笑）そつとしておいてあげてね。」

「ああ、分かった。では本題に戻すが、

「この件は、私も動こうではないか。」

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

不知火「ねえねえ、なんで途中、樹が『』で話してたの？」

作者「『』の部分は善吉へのすさまじい憎悪を表しています。」

樹「あれは自業自得だよ。まー諭古さんの恨みつてやつだよ。」

善吉「じゃあ、なんで途中からあんなに毒舌になったんだ？」

樹「あつー・善吉生きてたんだ。」

善吉「おい、作者。どうなってんだ。」

作者「ただ、単純に君を痛めつけるために、見稽古で不知火の毒舌を『』しただけです。」

善吉「そんなんかんた」「「「つるさーーー」」」、すいません。」

これは、樹&不知火&作者

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

めだかちゃんも参加し、第二回^{モンスター}犬捕獲大作戦決行中。

「で、なんだその格好は？」

な、なんとめだかちゃんが犬の格好で登場！（ボクは原作を知つてるので驚かないが）これも、ある意味犬だよね。

「ターゲットに仲間だと思つてもらつ作戦だ！動物と触れ合うにはまずこちらが動物の立場にたつて考えてみることが大切だからな。」

な、なんてバカなんだー。この人つて天然だよね。というか、天然以外のなにもでもない。

「なんだ？樹。この作戦、不満でもあるのか？」

「い、いやー。この作戦のほかに何か秘策でもあるんですか？たとえば、麻酔とか。」

「ない。」

「で、ですよね。」

ボクは、今日学んだ。この人、異常であり、^{てんねん}異常だ。

つと話している間にも犬発見！と思つたら、散歩中の犬だつた。

「しかし、あれがこんかいのターゲットか。」

「いや、絶対に違います（違うから）！」「

誰だよ、こんなとこで犬の散歩してんのは。いくら、小さいからってボクには怖い。やっぱ動物は、無理だなー。（憎まれ知らずは、OFFにしてある。）

「この犬、かわいいなー」

「善吉、こいつがかわいいなら犬もかわいがってやれ。モンスター」

「いや、あれとこれとは別だから。」

「だか、樹。確かにかわいいぞ。」

そういって、犬に近づく。すると・・・。

まー、御察しちゃさい。

さつき、めだかが近づくにつれて犬が後ずさりしていたが、

「ああ怖くないぞ！――一緒に遊ぼうじゃないか！」

ついに耐え切れずに、善吉の後ろに隠れたんですよ。（ボクじゃ

なくてよかつた。）

と思つたのも、つかの間なーんか見覚えのある犬がボクの後ろにいたんですよ。

「い、樹、後ろ！」

「うわああああああああああ！」

「あれが、^{ターゲット}いぬか。さあ怖くな」ぞー！一緒に帰る「ひじやないか！」

「……」

残念ながら、これは、^{モンスター}犬の驚きではない。ボクの驚きだ。なんでも^{アンリセント}憎まれ知らずはOFFにしてあるのにボクに懐いてんだー。

58

「・・・といふわけで犬は無事飼い主の元に帰りました。まあとりあえずは一件落着かなと。えーと大丈夫かめだかちゃん。生きてるかー」

めだかちゃんは、めっちゃんプルプル震えてる。

「私は、あんな可愛いわんちゃんにもなついてもらえないなんて、私はどうしようもなくダメな人間だ・・・」

えーとめだかちゃん、まーとりあえず・・・

「えーと大丈夫か樹。自殺するのはまだ早いぞー」

ボクは、周囲にどす黒い負のオーラを出していったそうだ。

「ボクは、どんなに生き物に懐いてもらえても受け入れることができないなんて、ボクはどうしようもなくダメで、クズで、底辺にしか存在してはいけない人間だ。うん、よし、死のう!」

だ、ダメだコイツ。めだかちゃん以上に自虐的になつてるし・・・。
。なんだか、二人対照的だなー。めだかちゃんは、動物が好きなのに動物がめだかちゃんを苦手なのに対し、樹は、動物が苦手なのに動物が樹を好きだなんて。これこそ、足して二で割りたいね。

「「それができたら、こんな苦労はしない!...!」」

そんなことで、善吉は僕たちを2時間慰めなければならなかつた。

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

作者「憎まれ知らず（アンリセント）の弱点発覚です。（樹だけで
すが）動物が好きになるのに〇〇・〇〇はつけないのでー（笑）

」

樹「作者死ね————」

ファーストキスは人生で一度だけなのに、何の心構えもせずにやられると案外簡単

祝PV120000、ユニーク2100

読者の方々本当にありがとうございます。感想、募集中です。

ファーストキスは人生で一度だけなのに、何の心構えもせずにやられたと案外驚

「あれ? ここは、どこ?」

ボクは、真っ白な世界にいた。まるで、転生のときにいたあの空間のようだ。でも、ボクは確か寝ているはずなのに。

「そうだよ、君はまだ寝ている。つまり、夢の中のことだ。」

振り向くとそこには1人の少女がいた。

「あなたは、「知つてると思つけどボクは安心院なじみ。平等なだけの人外だよ。」ですよね。ここには、アリバイプロック脇罪証明を使って来たのですか?」

「もちろん。でも、君に危害は与えないよ。ただ・・・」

「ただ?」

「ボクのスキルを受け取つてほしいんだ。」

「え? でも、ボクは別にスキルには困らないんです。それから、ライフセロ無効脛アンリセントで、ボクの憎まれ知らずを無効化しているみたいですから、無駄ですよ。」

「なるほど、君の見稽古アイゲームは、チートだね。」

「(あなたのほうがチートだと思うんだけど。)」

「ボクも、そしてめだかちゃんもチートだけ君には及ばない。それをまだ気付いてないだけさ。」

「心読むのが好きですねー。でも、ボクそろそろ帰りますんで。」

「それじゃ、また会おうね。それから、ボクのことは親しみをこめて『あんしんいんせん』と呼びなさい。」

「では、わよおー」

ボクは誰かに言葉を遮られた。いま、ボクの唇はボクのものではない。

「つて、なにキスしどんじゃー。ボクの、ボクの大切なファーストキスを奪いやがつて。このチートクソババアが。」

「大丈夫。これも^{リップサービス}口写しだから。」

「つで、どんなスキルをくれたんですか?」

「それは、^{ロックトロッカ}絶対防壁さ。あ、もうそろそろ時間だ。楽しかったよ、最後に・・・」

ボクの意識はここで途絶えた。

朝から、騒がしい田舎ましの音で起き上がる。ああ、楽しい一日の始まりだ。

ファーストキスは人生で一度だけなのに、何の心構えもせずにやられると案外簡単

作者「絶対防壁の説明は次回でいいでしょ？」

樹「お、ついにネタ切れですか。」

作者「そんなことあるわけないでしょ？（汗）」

結局紹介します。

リフレクトブロック
絶対防壁

あらゆるものと固めることができ。寒天状であるため、反射可能

「これまでのスキルのねらいは、といふながらただまとめておけじゃんーー

これまでのスキルのまとめです。

「これまでのスキルのむかいで、といいながらただまとめただけじゃん…」

二タ子樹 表人格

異常
アブノーマル

見稽古
アイグーム

見ただけで、相手の異常や過負荷を使うことができる。また、それと同時に、弱点も見極められる。ただし、最初の1回は、50%しか使うことができず、異常や過負荷自体を無効にすることはできない。現世で、すでに使っており、皆から恐れられていた。ちなみに、相手の技、運動能力等もコピー可能。

憎まれ知らず
アンコレセント

神に転生するときにもらつた。どんな動物にも敵視されない。ただし、人間には無効。また、自分は過負荷の対象にされない。これは、ON、OFFの切り替えができる。（動物に対するON・OFFは効かない）

絶対防壁
リフレクトプロッカー

安心院さんからもりつた。あらゆるものを持める。寒天状であるため、反射可能。使い道として、盾、足場、食事などに使える。

過負荷
マイナス

？？？

二タ子樹 裏人格

過負荷
マイナス

裏切りの樂園
トレチャリー・ティル・ナ・ノーグ

異常のみ、相手から奪い使うこともできる。これも、ON、OFF可能。また、無効にできない代わりに、奪つた異常は200%使うことができる。これは、安心院さんにも有効。さらに、人も操ることができる。（1人だけ）

異常
アブノーマル

選手交代
バトンタッチ

特定の人間と場所を入れ替えることができる。ただし、相手を認識しなければならない。表人格から、変わるときに使用。

「これまでのスキルのむかひ、といしながらただまごだけじゃんーー

ちなみに、絶対防壁の食事とは液体（甘いもの）をゼリーに変えます。作者は、ゼリー大好きなんです。

ルールを破る人を卑怯者、卑怯者って言つけどばれなきやいいんだよね 上

阿久根先輩、ドンマイ。

(話を読んだら分かります。)

ルールを破る人を卑怯者、卑怯者って言つければなきやいいんだよね 上

えーと、簡潔に言おつ。今、ボク達は柔道場にいる。もちろん、反則王こと、鍋島先輩からの依頼があつたからだ。

ちなみに、なぜボクがこんなに生徒会と生活することが多いかといつと、晴れて副生徒会長になった、なーんてことはなくボランティアですよ。めだかちゃんたちにも許可を取つてるのでOKなんですよ。まー実際のところ、原作での数多くの名シーンを見たいんですよ。というわけで、生徒会と一緒に行動中。

「やー やー。よつこせいらつしゃいました。ウチが差出人の鍋島猫美です。本日はビーザよろしく。」

あれが部長の鍋島さんか。どちらかと云ふと弱そうなんだよね。

「生徒会長の黒神めだかだ。今日は出来る限りのことをさせてもらおつ!」

なんでめだかちゃんは、先輩にも敬語を使わないんだ。どう考えても失礼だと思う。

「うんうん。頼りにしてるで生徒会長!」

握手してくる。なんかいつも見ると同級生みたいだよね。

「あれが反則王と呼ばれた鍋島さんか。優しそうな人だなあ。」

「たしかに。」

「ウチは、そんな怖い人やないで。あ、そういうやジブンに挨拶したいゆー奴あんねん。阿久根、阿久根クン。」

さすが、阿久根先輩。超美男子じゃん。ところで善吉はどうかな？あの二人、犬猿の仲だし。というか、すでに善吉は、敵対オーラ放つてる。

「『」無沙汰しておりますめだかさん。生徒会立ち上げの大事な時期にあなたに会いに行くのは迷惑になると控えておりましたが、あなたとの再会を心待ちにしておりました。」

善吉は気持ち悪そうな顔で見てる。正直原作を知っているボクも
気が引く。だって、さつきの言葉、誠意にあふれてるもん。

「硬苦しい真似は止め阿久根2年生。貴様ほどの男がそのように振舞つては示しがつくまい。」

「いえ、このよつた振舞いを恥とは思いません。今の俺があるのはあなたのおかげです。めだかさんには感謝してもしき」「私に感謝してるのならば頭を下げるな！……もつと胸を張れ！」「は、はい！めだかさんの御心のままに……！」

やっぱあの人Mだ。いや、DMだ。めだからちゃんの前だとプライドの欠片もないんですね。

「おつと再会を喜んでる場合ではないな。生徒会を執行せねば。
後継者。つまり新部長の選定だつたな。とりあえず貴様は特別枠だ
阿久根2年生。善吉との再会を楽しんでくるがよい。
」

そして、感動？の再会。

「久しぶりだね。えーとキミ誰だっけ？」

「人吉善吉ですよ。ところであなた一体誰ですか？」

「虫が！相変わらずめだかさんの足を引っ張る仕事に精を出してるようだな。言つておくがめだかさんの支持率が100%に達しなかつたのは100%キミのせいだぞ！」

「カツ！あんまり意地悪言わないで下さいよ。有名な柔道界のプリンスさんが下級生いじめなんてファンの子が知つたら泣いちゃいますよ？」

ところで、めだかちゃんは、阿久根先輩に善吉との再会を言つていたのに、なぜボクが一人の板ばさみになつているんだ。ここ、ものすごく居づらい。

「ところで、キミは？」

「えーと、1年1組一タ子樹です。よろしくお願ひします。」

「柔道部、2年1・1組阿久根高貴だ。いらっしゃりませよろしく。」

そういうて、ボクと阿久根先輩は握手をする。そういうえば、それから阿久根先輩の顔が赤い気が。

「いやあ、それにしても一姫ちゃん行儀が良くていいなあ。キミと違つて！」

「あのー阿久根先輩、言葉じゃ分からぬかも知れませんが一姫
じやなくて樹ですよ。」

「つてことは、「ボクは男です。」ごめん、すまなかつた。」

『別にいいですよ。阿久根先輩は、ボクの禁断のスイッチを押し
ただけですから。』

そのころ、柔道場では柔道部員が積みかさなつて倒れていた。誰
がやつたかはいうまでもないよね。

ルールを破る人を卑怯者、卑怯者つて言つたばれなきやいいんだよ

『別にいいですよ。阿久根先輩は、ボクの禁断のスイッチを押しただけですから。』

「おい、樹怖いぞ。」

『そり?』

「オレだってお前を見たとき、真っ先に女だと思ったぞ。」

『じゃーそこの先輩と一緒にボクに殺あそんでされてくれる?』

「阿久根先輩、『愁傷様です。』

「善吉君、ボクを見捨てないでくれよ。」

『ちよつと口数が多いんじゃない?』

注意　これは、あくまで表人格です。まー女と間違えられたからこいつなったんですよ(笑)

『作者も口数が多い。あと(笑)つてむかつく。』

訂正します。注意　かくかくしかじかでこいつなった。

『許してあげるよ。』

「（こ）れ、絶対意味伝わんないじゃん。」

『無駄なつづりなどいらないよ、書け。』

「すみません。」

『 そういうえば、提案なんだけどせつかく柔道場に来たんだから柔道で決めてよ。』

「「なにを?」

『それはもちろんボクの機嫌直しに負けたほうがなつてよ。』
サンドバック

「セリヤー名案やなー。」

鍋島先輩登場！

「一人が勝負すんだつたら、ウチにも提案があるで。阿久根クンが勝つたら生徒会に入り代わりに人吉クンが柔道部に入つて次の部長になるつてどうや？」

「そんなの『善吉』に拓否権はないよ。ついでだしいいじゃん。阿久根先輩なんだか喜んでるし。『ち、ちくしょ――――――!』。

『これで、鍋島先輩の狙いも、僕の処刑も同時に達成ですね。』

L

「鍋島先輩もつて、鍋島先輩まさか最初っからそのつもりで投書

したんですか？」

「善吉も氣づいたか。（でも、半分氣付いてないぞ。僕の処刑の意味を。）

「うん！人吉クンみたいながんばり屋さんはウチはめっちゃ好きなんよ！」

「オレ、負ける前提じゃん！」

『『『そうだよ（やひや）』』』

というわけで、役職、そして生と死をかけた柔道対決の開始です。

「ルールは柔道部恒例の阿久根方式！！無制限一本勝負 対 無制限一本勝負！ 阿久根クンに十本とられる前に一本でもとれたら自分の勝ちや人吉クン！」

「フン！尻尾をまいて逃げなかつたことだけは褒めてやるつ。あ、でも虫に尻尾はなかつたか。」

「なんですか、逃げるつてありだつたんですか？先に言つてくれさこよ、そういうことば。」

「逃げる？ そなものありなわけなかりうが。」

めだかちゃん推参！……………れりき見たときより柔道部員の山が高くなつてゐるし。

「人吉善吉、私は貴様に負けるなとは言わん！しかし逃げる」とは許さんぞ！」

確かにここで逃げるのは代償が大きすぎる。プライドとか、めだかちゃんの信頼とか、命とか。

「そんなことわかつてゐよー。」

「…………それでは始め…………」

さあ、どつちが死ぬかな？

「先手必勝…………」

ドカツ！

あーもひー本とられたよ…………

「…………いやーそれにしてもさすが阿久根クン、綺麗な一本やなー。」

『さすが柔道界のプリンスと言われてるだけありますよね。』

「本当にや。後の先取らせたら右に出るものはないさわ。…………ホンマ天才的でつまらん柔道や。」

『・・・・・隨分天才が嫌いなようですね、鍋島先輩。』

「うん嫌いやで、大嫌いや。黒神ちゃんや阿久根クンのこともな。才能を努力で踏みにじるためにウチは柔道をやつとんのよ。」

『努力かー。・・・・・羨ましいですね。』

「羨ましいってどういふことや?」

『いや、気にしないでください。』

「そつか、まつ黒神ちゃんのような天才は天才同士、凡人は凡人同士でつるもうやないか。ウチの柔道に阿久根クンはいらん。ジブンにやるわ。そんかし人吉クンくれや。」

「ふむ、ならば安心しろ鍋島3年生。天才などいない。あと善吉はやらん。」

ところで、一人はどうなったかな。つて、善吉もつゝ本取られてんじやん!

「善吉ーー！」

ぐ、来るぞ、あの名言が。

「いつ如何なる場合においても私は貴様に負けるなどは言わん！
！！だから勝つて！！！貴様がいなくなつたら私はすゞく嫌だぞ！
困るぞ！泣いちゃうぞ！－－！」

めだかちゃん、めだちゃん目ウルウルしてゐるよ。

「う・・・・あーもひわかつたよ……お前の泣くところ見てたくないしな……」

「な、なに!?

ドカッ!!

「文字通りアンタの足も引っ張つてもみました。つてといひで句を認めてくれるんでしたつけ? 阿久根先輩」

「…………負けを認めるーー本取られたよ。」

ほんとにめだかの応援だけで勝つた! (原作見てるから知ってるけど。)

「信じられへん。阿久根クンにホンマに勝つてしまつた……いやそれよりウチも双手狩りならウチもようしきだ人吉クンはみんなにも綺麗に……」

「綺麗も汚いもないし天才も凡人もいない。いるのはただ懸命な人間だけだ。私も貴様も何も変わらんよ。」

『善吉、よく勝つたなー』

「オレ、やつぱ負ける前提だったの? いやさ、あんなこと言われたらもう勝しかないだろ?」

「じゃ一次や。」

「 「 「 次? 」 」 」

「いやーータ子クン。さつきジブン『努力かー。・・・・・羨ましいですね。』って言つてたやる。だからウチが努力の大切さをジブンに教えてやるんよ。」

『つてことは。』

「ウチと柔道で勝負やーつと言つてもむづきジブン、柔道着の着かたもあやふやつたし初心者か?」

『もちろん。』

「つてことはウチは、手かる『必要ありません。鍋島先輩が勝つたらあれば免除にしますから』つそか。」

つというわけで柔道2試合目、スタート

『お互い手加減はなしですよ。』

「もちろんやで。ウチが努力の大切さを教えたる。」

「・・・・それでは始め! ! ! 」

「いくでー、ニタ子クン。」

ドカツ!

「な、なんやと？」

結果は明確だった。ボクの勝ちだ。

『だから言つたじゃないですか、努力が羨ましいって。』

「樹、お前ほんとに初心者だよな？」

『もちろん。今日初めて見たよ。』

「でも、なんでそんなにうまいんや？ 阿久根クン、いやそれ以上の実力やつたで。」

『柔道は、一目見た程度で十分です。』

「樹、貴様さつきから見た見たと言つてているが。」

『ボクの異常は見稽古です。ボクは、努力しないでも見ただけでできてしまう。努力しない人間でなく努力できない人間なんです。』

というわけで、柔道場イベントも終了し新たな仲間?も加わる。

「阿久根先輩は、部活をやめたらしい。」

善吉が生徒会室の扉を開けると

「あ――――――な、なんでお前がここに居るんだ――――――」

生徒会室でなんか当然のよう^に着替えてるし。

まさかあの人・・・・

「ン？ ああ人吉クンと一タ子クンか。キミを追い出すのはあきらめたが俺はめだかさんをあきらめたわけではないのでな。」

やつぱり・・・・・

「本日生徒会執行部書記職に任命された2年11組の阿久根高貴だ。よろしくお願ひします。先輩！！」

なんで、先輩なんだ。あと、

『覚悟はいいかい？ ド^{ウザメン}後輩。』

その日、生徒会室から絶え間なく誰かの叫び声が聞こえたと言つ。

ルールを破る人を卑怯者、卑怯者って言つけどばれなきやいいんだよ下

少々長くて疲れたー。

好きな人に想いを伝える時ってメール派？手紙派？それともダイレクト派？

ダイレクト派というのは、面と向かって告ること。それができる人は怖いもの知らずですかねー。

好きな人に想いを伝える時ってメール派？手紙派？それともダイレクト派？

「昨日は楽しかったなー。」

「樹、やつとしゃべり方が普通になつたな。」

「だつて、昨日阿久根先輩がボクのために機嫌直しになつてくれたからね。つと話しているどご本人登場だよ。おはよう、阿久根先輩。」

樹たちの前には、やつれた阿久根先輩がいた。

「おはよう。」

「先輩、どうしてそんなにやつれてんですか？」

「それは、昨日君がボクを処刑したからに決まってるだろ。」

「そうええ、そんなこともありましたねー（笑）そんなに楽しかつたんですか？」

「逆だよ逆。もう一度とあんなのじめんだよ。」

「先輩がボクのスイッチを押したからこいつなつたんですよ。」

「そのスイッチは、あと何個残つてるんだ？」

「そうですねーあと一万個弱ですかねー。」

「ふふあざわだよー。」

「ジョークですよ、ジョーク。あと一万個強ですよ。」

「いや、むしろ増えてるからね。」

「まー、そこはスルーで。でも、スイッチなんか滅多に押される
こともないと思うよ。たとえば、『「樹、オレ完全に今空気化して
るよなー。』」善吉先言わないでよ。今せっかく例として挙げようと思つたのに。」

「えつ?」

『ボクのスイッチの一つは、『おうとしたことを先に言われるこ
とだよ。善吉、ボクを起爆させちゃったね（笑）』

「（スイッチ押しやす過ぎだな。）」「

「とこつ」とまた一人犠牲者がでたのであつた。（ざまーみろ
ww）

「おー作者、最後俺らに対する本音が出てたぞ。」「

時は過ぎ、今生徒会室に4人集まつてこる。

「ところで、一人はなんでそんなに顔がやつれているんだ?」

「「アイツのせこです。」」

「何のこと?」

「「（普通に）ひりを切つてゐし。」」

「まーよー。ところで今日の依頼だが、手紙の代筆だそつだ。」

「ところど、ボクはおひりに帰るー。なんでかつて?自分で言つのもなんだが、ボクの字は藝術の域に達しているんだ。もちろんつまいわけではない。ボクの字は、誰が見ても暗号だからな。」

「あのー、ボク字が下手なんで帰ります。」

「ふむ?何故だ?」

「めだかちゃん。樹、字がめつちや汚いんだよ。こいつのノート見たら暗号ー?って思つたからな」

「（善吉ナイスフォロー。）」

「ふむ。仕方ない。最近疲れているようだしな。今日は帰つていだらう。」

「すみませんねー。では、さよなら。（原作通りか見たいんだけど、今日近所のスーパーで、特売があるからねー。お金つて大事だね。）」

帰ろうとしたとき、めだかちゃんに止められた。めだかちゃんが帰つていいって言つたじゃん。

「残念だが、帰らせんぞ。樹が、スーパーの特売だけで人を見捨てるような人間だとは思わなかつたぞ。」

「（な、心読まれた！？）いやだなー、さつき善吉が言つたようにボクは字が下手なんです。皆さんの足手まといにならないためでもあるんですよ。」

「樹、こんなときのためにお前の異常があるのだろう。ほら、一
人とも樹を逃がすな。」

「何すんですか。」

「私の字をしつかりと見るがいい。」

じつして、ボクは字が上手くなつてしまつた。

ということで、八代先輩の代筆作戦、決行です。

好きな人に想いを伝える時つてメール派？手紙派？それともダイレクト派？

かなりの原作ブレイクですねー。

祝PV22000

ユニーク3500

「愛読の方々、本当にありがとうございます。」

好きな人に想いを伝える時ってメール派？手紙派？それともダイレクト派？

「ところで、なんでボクの字を上手くしておきながら、阿久根先輩の監視役なんですか？」

「阿久根書記の初仕事だからだ。しかも、樹はまだ字が上手くなつておらんぞ。丁寧な字というのわな、「もづ、いいです。」そつかそれならよかつた。では、二人とも任せたぞ。」

つとこつわけで、今ボクたちは八代先輩のところにいる。

「ラブレター！？」

阿久根先輩が不思議そうに聞き返した。さすがに失礼だと思うが・
・・。

「そーだよ！書いてほしいのはラブレターだよ。何か文句あんのかよ！」

「す、すみません。」

なんという八代先輩の威圧感。いろいろな意味ですさまじい。

「あたしもさ、自分でわかつてんだよ。あたしみたいなガサツな女が愛だの恋だのちゃんとおかいな！でも好きになっちゃなうどうしようもねーじゃん。」

「そうですね、あなたのいう通りです。八代先輩。」

阿久根は俯いてボソッと言葉を発した。どうせ昔の自分と照らし合わせているのだろう（笑）

「わかりました！黒神めだか率いる生徒会執行部書記としてどんな男でも心を動かさずにはいられない最高の名文を仕上げて差し上げます！！！」

「お、おう。まあ、よろしく頼むぜー。」

と、まあ一件落着になる。　　なーんて展開は待っていない。
ドンマイ、阿久根先輩。

そして、阿久根先輩が書き終わって生徒会室に戻ってきた。ところで、今回ボク完全に空氣化してゐるよねー（泣）

「書き終わりました。確認してくださいめだかさん。」

めだかがかなり冷めた目で本文を讀んでいるように、ボクには見える。原作を知っているせいか？

「・・・・・」

「いやー大変でした！なにせ女子の気持ちになつて恋文を書くな

ど初めての経験だったのですから。

しかしその甲斐あつてかなりの名文が仕上がつたと自負しております！」

お見事、阿久根先輩。見事めだかちゃんを怒らせるなんでばかな奴め。（まーボクもセリフがない時点で運がないが。）

「……つまり、文面も貴様が考えたわけだ。」

「ええー…どうでしようー…よければ早速八代先輩に届けてきますが
「阿久根書記！…！」

「八代3年生が意中の男に伝えたいのは言葉か気持ちかどっちだ
？」

「・・・・・え？」

「貴様の字で、貴様の文章で、伝わるものとは一体なんだ？」

そう言つとめだかは立ち上がりドアに向かつて歩き出した。

「え・・・あのしかし、代筆してくれというのが依頼なのですか
ら「思い上がるな。人が人に代われるものか…」・・・」

「八代3年生は困つてんじゃない願つてるだけだ。問題などないのに問題を作り出しているだけだ。

貴様ならそんな彼女を諭してやれると思つていたがな。貴様には絶望した、もう何もしなくていいぞ。

「

そう言つとめだかは部屋から出ていった。部屋には冷たい風が流れた。

「あーあ、めだかちゃんは相変わらず身内には容赦ねーな。」

善吉、いかにもオレにはカンケーねー、みたいなセリフを言つた。

「ま、気にしちゃダメですよ。アンタは何も間違っちゃいない。例によつてめだかちゃんが正し過ぎるだけ」「黙れ、俺は虫に慰められるほど落ちぶれてはいなー!」・・・

「そして一度や二度拒絶されたくらいで諦めるほどできた人間でもない。」

そう言つと阿久根先輩は、書いた紙を破り歩き出した。あーボクも行かなきや。今度はヒトとして。

2人はドアから出て行つた。

「え・・・なつなにこれ!?」

教室にいた八代先輩の前に、阿久根先輩は何十冊もの本を置いた。

「見ての通りです。あなたの気持ちに相応しい字が書けるよつこ

れから俺と練習しましょつ。」

「な、何言つてんだ？あたしそんなこと頼んでないぜ？」

自分の頼んだ依頼と違うのに困惑つてゐるようだ。確かに身勝手だが……って、ボクはどうちの見方なんだ？

「頼まれてもないことを執行してこそ生徒会です。八代先輩、自分の気持ちを自分の字で伝えてこそラブレターでしょう。」

「…………」

大事な事に気付いた阿久根先輩ならもう大丈夫だろう。

「安心してください、出来るまで俺がどことん『うるせえええっ！――！』つげふ！」

ちょ、ちょっとタイム。なんで、阿久根先輩が蹴り飛ばされてんだ？しかも、気絶してるし。

ギロ（これは、八代先輩のにらみです。）

「何が生徒会だよ！ お前もあたしの前から消える！」

お前つてボクだよね？ つと言つかボクしかいないよね？

「これも、めだかちゃんの依頼なんで『消えろよ――――！』

！」

ボクは、殴りかかってきた八代先輩の拳を受け止めた。だが、手

ではない。顔面でだ。正直痛い。でも・・・

「話ぐらじ聞いてくださいよ。だいたい字が汚いとしても自分で出すなら自分で書けばいいでしょう」

「つるせえ！…それができるなら最初からそうしてたって…！」

「それをできるようにするために努力すればいいじゃないですか。」

「

「つ…！」

これを聞いた八代先輩は抵抗を止めてビックリしたような顔でこつちを見た。

「確かに、ボクたちが書けばきれいな字で書けます。でも、それじゃ、意味ないじゃありませんか。ボクはあなたじゃない。だから、あなたの想いがわからぬ。あなたの、その本当の想いがわかるのは、あなたしかいないんです。」

「・・・・・」

「汚い字であつたつてあなたの想いは変わらない。それでも汚い字が嫌なら努力して綺麗な字を書けばいいじゃないですか。あなたの伝えたい、彼への想いをそのまま伝えればいいんです。」

「・・・・・」

「それでも、不安だったら？その時に、生徒会に頼つてください。生徒会は、24時間365日活動してますから。」

「あ、ちょ、ちょっと待てよ」

廊下でノビている阿久根先輩を起こそうと教室から出ようとすると八代先輩に止められた。

「あ、あのよ、その・・・あ、ありがとな」

「別にいいですよ、ツンデレさん。やしおせなばい彼に、想いが伝わると言いですわ。」

八代が顔を真っ赤にしてボクにお礼を言った。

まー、そんな訳で阿久根先輩を起こしラブレター制作を行つていたが、ついに本人が満足する出来に完成して一応依頼は達成された。

「・・・といふことで依頼は達成しました。」

「うむ、終わって見れば100満点の仕事ぶりだ。見事な手際だよ。」

「一体何を評価されているのかわかりません。だいたい私はあまり何もしていません。」

阿久根先輩、これは謙虚ではなく事実だからな。

「まあそう言つたな、成果をあげた時は謙虚するでない。私に貴様を讃めさせん。」

そう言つてめだかは椅子から立ち上がり阿久根に近付いて手を伸ばした。

「よくやつたな阿久根書記、私が間違つていた。ありがとう…！」

めだかちゃんが阿久根先輩の頭を撫でながら至近距離で笑顔を見せると阿久根の頭はオーバーヒートした。

そんな訳で、生徒会に新たに一輪の花が加わった。

ところで、今回の雑談。（今回だけです。）

次の日、こんな依頼が届いた。

『昨日、八代先輩と、一タ子君がいちゃいちゃしてたので注意してください』

また、こんな依頼も届いた。

『昨日から、八代先輩が一タ子君を見るたびに顔を真っ赤にさせています』

めだかちゃんが満面の笑みで「けいらを見ている。

「樹、昨日のこと少し聞きたいのだがいいか?」

「あつー！そりゃもう二、三時間だ。帰らなきやな」「ガシッ！少し話を聞きたいんだが。」・・・はい、分かりました。」

そんな訳で、生徒会に真っ赤な一タ子樹といつ名の花が咲いた。

好きな人に想いを伝える時つてメール派？手紙派？それともダイレクト派？

作者「最後の依頼主はもちろん不知火です。樹の言葉じゃないがドンマイ、樹。」

樹「人間って誰でも真っ赤な花になれるんだね（笑）」

作者「壊れちゃった」

金で買えないもの?それは、命と友情だ 上(前書き)

「うーうーの、言つてみたかつたんです。
あと、評価ポイント100突破!! 読者の方々、ありがとうございます。
今後も、感想、評価お願いします。

金で買えないもの？それは、命と友情だ　上

「じいじ、今じいには生徒会室である。」の時期といつと・・・

「めだかさん、俺達の十倍は働いてるはずなんですけどね。」

「否、そんなことはない、さすがの私も最近の業務ラッシュには少し参つておる。」

そう言いながら会長ちゃんは片手2本両手4本でペンを持つて書類を片付けていく。

「どうがですか？」

「勧誘期間が終わり部活動が本格化したのが大きいな。部費にする陳情が多くなる！副会長はともかく、会計の不在はやっぱ痛いな。」

めだかちゃんがボクの方をまじまじと見つめる。そんな事してもボクは生徒会に入る気はさらさらない。ただ、近くに居たいだけなのだ。（これは告白ではありません。）

「元柔道部の人間として言わせてもらえば部費は一円でも多いほうがいいですからね。」

「じいじでＫＹが提案する。ゼンキチ

「じいだ完成したバカでけえ屋内プールがあつただろ。次の日曜にそこでイベント開催して優勝した部が増額予算総取りつていう

のはどうだ?」

「まー陸上部の優位は消えるけど、でもプールじゃ今度は水系の部活が有利なんじゃない?」

「カツ!、その辺はちゃんと考へてあるよ。水中パン食い競争とか水中棒倒しとか、泳ぎとあんま関係ねー競技しかやらねーつもりだし。」

「異議あり! 水中だとパンがふやけて美味しくないであります」

久々の不知火の登場です。
ブラックホール

「意見するなら競争について意見しろよ!」

「何なら、普通の早食いならいいんじゃない?」

「もうプール関係なくなつちやつたじやねえか!」

善吉は連續のツツツツで息も途絶え途絶えだ。

「プールって言つ」とは・・・」

「なんだよ、なんか言いたい事でもあるのかよ不知火先生。」

「言いたい」と?ないよーない 一個もない 」

不知火は明らかに何か言いたい事があるようだが勿体ぶつている。善吉も不知火の性格を知っているので深く追求はしない。

「ただ場所が水中じゃ、公平なんてありえないじゃない?って言いたいだけだよーん」

「まあね。めだかちゃんが届く時点で公平なんて言葉は無いようなもんですもんね。」

「樹、それを言つたらおしまこだ。」

「善吉は、銀魂きつての地味&ツンツン役の新八を田舎じでこののか?」

「でもどうかな?何せ箱庭学園の競泳部には金につけた三十四のドビウオがいるからや」

「競泳部のドビウオ?なんだそりゃ?ビウコヒトだよ、教えろよー。」

「バシイツ!」

「教えてください………ドジョー?」

「教えてください。」

「よからづ」

「善吉、君までもこの道を歩んだらダメだ。Mは、阿久根先輩で十分だ。」

「あ、樹には無償で教えてあげるよ」

「いやなんで樹だけ扱いが違うんだよーーー。」

「もちろん、人望の差だよ。」

「腹立つ！確かにその通りだと思うから腹立つ。」

「残念ながら、ボクは諭吉さんおじいさんであいつからの人望を買っているんだ。これぐらいの優遇は当然でしょう。」

「3人とも特待生でその実力は折り紙つきだけどとにかく金の亡者！賞金つきのレースにしか出場しないとか？お金で雇われて他校の選手として泳いだりとか！八百長なんて当たり前で独自に賭けレースを運営してるなんて話もあつたねえまあ用心しとけば？あのお嬢様は無敵であつても決して無敗じゃあないんだからさ」

「まあ大丈夫だろ。めだかちゃんに樹もいるんだからな。」

「えー？」

「めだかちゃんが生徒会として樹を出すって言つてだぜ？」

「めだかちゃんは勘違いしているな。ボクは生徒会ではなく、あくまで準生徒会なのに。」

金、金、金、金いう奴は、大抵金に裏切られた奴である

水中運動会 当日

善吉 side

「陳情していた1・5の部活が全て参加か。急なイベントだった割にはよく集まつたものだ。」

少し引き気味に思つていると阿久根先輩が話し掛けてきた。確かによくこれだけ集まつたと俺も思つ。やっぱどこの部活も不景気なのか。

「そつすね、陸上部に柔道部、美術部に剣道部までいるぞ。・・・
・・ん？」

おつかしいな。何か剣道部の最後部によく見る顔がある。いや、
氣のせい。しかも、樹スクール水着だし。

？？？ 気のせいではなかつた。確かに樹が剣道部にいる。

樹 side

「樹、なんで居るんだ。しかも剣道部のどこの？」

善吉が驚いた様子でやつてきた。

「いやー、それは「おお、やはり来たか。」ますい。」

ボクが話そぐとするのを遮つてめだかちゃんが現れた。

「お前なら来ると信じていたぞ」

めだかちゃんが笑みを浮かべながら囁つ。その顔はボクが自分のチームだと疑わない顔だ。

「めだかちゃん、残念だか樹は剣道部としての参加だ。」

善吉がそう言つとめだかちゃんは笑みを浮かべた顔のままか目は笑つていない。殺^ヤらねる。

「・・・どうぞ」とか教えて欲しいものだな。」

「これは、かくかくしかじかでして・・・」

めだかちゃんは相変わらず笑つているが、殺氣がさつきからずい。って、これ、ギャグじゃん。まったく笑えねー。この状況マジで洒落にならないからね。

「この前、剣道場で門司先輩の竹刀を勝手に使つた上に折っちゃつたんです。その反省にと・・・。」

「理由はわかった。だが、私は樹と一緒にチームじゃなければ嫌だ。」

「嫌だって言つてもどうしようもないでしょ。」

「なら私が剣道部に私財を投じるから生徒会として参加しない。」

「なんと言つ自分勝手！…？」

ナイズ、善吉のツッコミ。

「ちよつとめだかちやん。」

「む、なんだ善吉？？」

「樹と同じチームじゃないほつがいいかもしれない。」

「なぜだ？私は生徒会執行と共に樹と一緒にチームで頑張る。その流れで生徒会に入らせることが出来れば一石二鳥ではないか。」

「（まだボクのことにあきらめていなかつたんですね。）

「でも久しぶりに樹と戦えるじゃないか。」

「む、確か！」。

善吉がめだかちゃんを呼んで密談をしていると思ったらめだかがわざとは違う笑みを浮かべた。今度は田も笑つてゐから安心だ。

「今日は違うチームで戦おう、全力でな…！」

「じゃあいざ。」

ソウして両チームが分かれるときめだかちゃんが

「樹、その服装似合つてゐるぞ。」

『それはどうも。』

善吉と阿久根先輩が気づいたときは遅かった。

善吉と阿久根先輩は自らの無事を祈り、めだかはわくわくして、水中運動会の幕が開いた。

ここで大会の説明

・代表者3人名の参加

・男子（樹は女子扱い）にはヘルパー装着

・点数が生徒会を上回ると予算が3倍

「えー第一種目は水中玉入れです。」

司会の人気がそう言つた。つてあそこに不知火居ね？

・・・・まあいいか。とにかくこの種目は皆同点だろう。ちなみに、ボクたちチームは、ボクのほかに門司先輩、日向君だ。え！門司先輩は部活やめたんじゃって思つてる？これは、ボクが強引に出場させた。先輩との思い出作りだよ。また、この服装は勝つため

の秘策なんだー。借りを返すため一タ子樹はプライドを捨てました。

「よーい始め……！」

合図と同時にめだかちゃんが水の中にもぐった。

「あの大技、見させてもらひね。」

あれを見たかったのでボクは水から顔をだした。

ザバーン！！！

スッ

「な、なーんと生徒会チーム一気に20ポイント獲得！！！」

「ちよつと門司先輩と口向君は待っていてくださいね。」

「ここで、疑問が。なぜ、ボクが見るたびに一人は顔を赤くしているのか。（まさか、ホモ？）っという事とは置いといてボクの再現の時間だ。

ザバーン！！！

スッ

「な、なーんと剣道部も一気に20ポイント獲得！！！」

「の」の、「の」ようやく皆が攻略法に気付き始め、結果柔道部以外同率一位となつた。

ボクが、二人に見稽古の説明をしていると金の亡ムツリヲ者の声がした。

「命？そんなぞーでもいーもんいらねーよ。俺達は命よりも金が欲しい！若き生徒会長様にやーわかんねーだろーけど俺達は一円に笑つて一円に死ぬのさ！」

「くだらない。ボクにとって金は

憎い。

「

金、金、金、金いう奴は、大抵金に裏切られた奴である（後書き）

作者「最後を憎いでしましたねー。ちなみにボクも札束のプールにあこがれています。」

理不尽な言い訳や逆切れも場合によれば武器となるであつた（前編）

裏人格のマイナス、『裏切りの楽園』の補足を3話のあとがきに入れました。

それと、題名多少変えました。（無礼者削除）

理不尽な言い訳や逆切れも場合によれば武器になるであら。

「増額部費争奪一部活動対抗水中運動会……第一回戦！水中一人三脚です！……」

次は一人三脚か。と言つてもボクは今回出場しない。なぜなら、玉入れでめだかちゃんの「ロー」をやつてしまつたからだ。うん、みんなの視線、めちゃ怖い。

「なーんや一回戦は一人とも見学かいな。」

登場なべじませんば反則王……柔道部といつと、唯一玉入れで16ポイントのとこだつたな。

「私ばかりが出張つては団体戦の意味があるまい。貴様も同じ考えではないのか？鍋島3年生。」

「まあ後輩にも出番やらんとな。でも樹君は何で出てないんや？」

「それは、わざわざの玉入れで田立つちやつたんで皆から視線が飛んでくるんですよ。」

「樹、私はそんな目線など気にしてないぞ。」

「めだかちゃんは、人の上に立つのに慣れてるからですよ。」

「確かにそーや。つで、それからスタートやでー。」

「やあ位置についてよおおおおおい・・・・・・どんつ・・・・・」

競技の始まりと同時に善吉と阿久根の生徒会ペアが一気にトップに躍り出たがとても醜い絵だった

「（お互にいがみ合つて醜い。）」

「おい、樹君。剣道部も人のこと言へんでー。」

「（心読まれた！？）と言つのは？」

「生徒会の横にぴつたりつこむるの、剣道部やで。」

「な・・・（泳ぎながら一人で蹴落としあつてるし）」

ちなみに実況室にいる不知火は大爆笑している。しかしあるが身体能力が高くてとても速い。

まー結局、競泳部が最後脅威の「じぼつ抜きをし、生徒会は惜しくも3位でした。つで剣道部はといふと・・・・田向君もろ足つりてんじやん！しかも、そんな状況でまだゴールしてないし。結果8位だった。

『（あの馬鹿コンビそんなに死に急がなくていいの？）（笑）』

うなぎ一匹 1ポイント

今回は、日向君が門司先輩との蹴落とし合いで足をつったのでこの種目は門司先輩がでる。え?ボクはもちろんでないよ。だつて、うなぎ嫌いだもん。ちなみに、さっきの謝罪のため二人には賭けをしてもらつていて。まー結果は決まつているが。

結果、猫美は9ポイントだが競泳部の1年生エース喜界島はそれを上回る13匹も捕まえた。そして、門司先輩はさらに上の14匹だ。門司先輩の勝利条件はこの種目の1位だから、日向君の負け……。
・じゃない！？

「いやーいつも動物に嫌われているのに今田は、嘘の様につなぎが寄ってきたなー。」

「めだかちゃん、だからって22ポイントは反則だろ。ほら、司会席の不知火もさすがに驚いてるし。」

な、なんと動物避けをめだかちゃんが克服し22匹捕まえたのだ。
つてことあるか――――――――――――

「なんで、なんでなんだ？生徒会が1位なんて。」

「おい、樹落ち着け。原因はお前だ」

「はっじつじつ」とへ。

「樹は動物に好かれ過ぎる体質だろ？」

「そうだけど、だから剣道部が1位になれると思ったんじゃん。」

「めだかちゃんは、門司先輩の近くに樹が行くと見込んで移動してたんだ。」

「それって。」

「めだかちゃんのいいところ取りだ。樹の周りに集まるつなぎを捕まえていたんだ。って樹？」

「オレのせいで剣道部の負けかー。」

「樹、落ち込みすぎだ。まだけ」「黙れ、俺は虫に慰められるほど落ちぶれてはいけない」樹どうした？

「絶対にあの憎き生徒会に勝つ……。」

「あのてびのだよ。しかも、お前達に憎まれることにしてねーし。つていうか、これジバンのミスからの逆切れって奴だよなー。つて樹どこ行つた？」

そのころ、ボクたちは騎馬戦の作戦会議を開いていた。（原作を

知っているから開けました。）

「部活動対抗水中運動会！最終競技は水中騎馬戦です！泣いても笑ってもこれで優勝チームが決定します！部費増額の権利を手にするのは果たしてどのクラブとなるのでしょうか！」

果たして勝つのは、生徒会か？それとも剣道部か？それとも・・・

卑怯者にまじめにやつて勝つ 「これが本当の正義は勝つって奴だと思つ」(前書き)

樹「サブタイトル、鍋島先輩とボクですか?」

作者「そうだよ。でも、樹君あんなこと言つて実はナルシストだつたりするの?」

樹「サブタイトル、ボク考えてませんから。」

作者「「めぐ」「めぐ、訂正するよ。」

『卑怯者にまじめにやつて勝つ』これが本当の正義は勝つって奴だと思つ もう樹』

樹「だから、ボクはそんなこと言つてない……」

卑怯者にまじめにやつて勝つ。これが本当に正義は勝つ。奴だと想つ

「部活動対抗水中運動会！最終競技は水中騎馬戦です！泣いても笑ってもこれで優勝チームが決定します！部費増額の権利を手にすることは果たしてどのクラブとなるのでしょうか？」

ついに、最終競技ですね。さすがに、今回ばかりは出ますよ。もちろん上で。ちなみに、二人の賭けで勝った日向君は、門司先輩に一週間敬語を使わせるそうです。日向君ってこんなVだつける？それでは、本題に戻ります。

「では解説の不知火さんルール説明をお願いします！」

「はいはーい！」の世に知らぬことなし！ — 文字流不知火ちゃん
でーす」

・・・・なんと見え透いた嘘を。

「ま、構えなくてもフツーの騎馬戦だよ ハチマキの奪い合い！ハチマキ取られたり騎馬が崩れて水中に落ちたりしたら失格ですたつだしそー！今のままじゃ下位チームに望みがなさすぎなので、ここでクイズ番組的な救済ルール！集めたハチマキの数ではなく質で獲得ポイントを決定！上位チームのハチマキほど高くポイントを設定します」

剣道部は、4位なのでこの件は関係ナッシング！どうせ不知火の思惑で、生徒会と競泳部の一騎打ちが狙いだろう。って言うかもう両チーム敵対関係だし・・・。

「それではラストバトル！位置にひいてよおーい・・・・・・・どん
つ！！」

始まりと同時に競泳部と生徒会がぶつかりあった。そのころ、剣道部は、

「鍋島先輩、やはり柔道部のやくせんって。」

「わすが樹西や。やつやで。あの2チームが戦っている間に残り13チームの鉢巻を取つてうちからが優勝や。」

「奇遇ですね。剣道部も全く同じ作戦ですよ。」

「いや、じつのはじつけ。今は休戦つて」と13チームの鉢巻を取つたらいいこじ一騎打ちや。それで勝った方が総取りや。」

「

「いいですよ。」

「「では、始めましょ。」（始めるで。）」「

両チーム後ろのチームの鉢巻を取る。二人が話し合っている間に鉢巻を取ろうとしていたのだ。まー両チームに気付かれ、未遂に終わつたが。

「一分後～つて、両チーム集めんの早…」

「剣道部もなかなかやなー。」

「鍋島先輩も伊達に反則王と言われてないんですね。」

「「では、行きましょつか。（そろそろ行こう。）」「

両チームの距離が一気に縮まる。そして…

両チームとも鉢巻は頭に残っていた。が、

「うちの完敗や。」

「わすが、反則王ですね。一騎打ちでダミーを用意するなんて。」

「ジブンもなかなかやつたでー。ダミーだけを的確に取るつてさすが樹君つてとこや。」

「なかなか楽しかつたです。いいです。柔道部の取つた鉢巻はもうらっしゃません。」

「え、でもそれじゃあ・・・」

「今から生徒会と競泳部の鉢巻を取りに行きます。」
かりに

そのころ、2チームは・・・

「生徒会！黒神めだか！ここで突き飛ばされた―――つ―――騎馬も無残に崩れ！これは勝負あつた―――つ―――！」

「甘えたことを抜かすな！たとえ貴様が地獄のように不幸でも、そんなことが命を粗末にしていい理由になるか！！」

「ぐ・・・黒神めだか生徒会長ー水のー上にー立つてーるーーだつ
とおおおーーーつー?」

さすが、
バケモノ。めだかちゃん
でも・・・

「あ・・・いえ違います！これは！これはああ！！生徒会失格です。」

「えー!?」

「どうして」とだ？私は薔薇のヘルパーの上に立っているはずだが。

「そのヘルパーってこれですか？」

「！？ なんで樹がそれを？」

「めだかちゃんが落ちる寸前に回収したんです。」

もちろん、安心院さんから見稽古した腑罪証明を使ってね。あれ、なかなか便利だし。

「そして、めだかちゃんは水の上に立たされているんですね。」

なぜか、めだかちゃんの足元だけ水が寒天状になつていい。

「な、なに？」

「今日は、ボクの勝ちですね。あと、競泳部の皆さん、残念ながら今の得点は剣道部に入りますから。」

「」「「どうこう」と（だ）？」

「ほら、生徒会の鉢巻です。だから、部費を3倍にしたいならボク達の鉢巻を取ってください。あと一つ、お金よりも大切なものはありますよ。」

卑怯者にまじめにやつて勝つ われが本当の正義は勝つって奴だと想つ（後書き）

次回で水中運動会を終わらせます。こしてもう部はあらわいですね。

金で買えないもの?それは、命と友情だ 下

「ほら、生徒会の鉢巻です。だから、部費を3倍にしたいならボク達の鉢巻を取ってください。あと一つ、お金よりも大切なものはありますよ。」

現段階で、競泳部は一つも鉢巻を取りていなかったため、生徒会には勝てないのだ。

「（うわ、やめてくれや、『金より大切な物がある』は喜界島には禁句なのに生徒会長さんに続きこの子まで言うなんて）」

種子島がそう思つていると喜界島が今の感情を表すようにぶるぶる震えていた

「あの娘、私たちの獲物を奪つたくせに、あの発言。ムカついた！…だからあの女を私たちのためにただ働きされよつ！」

喜界島が凄い形相で言つ。心なしか競泳部の2人も怯えている。そして、生徒会の2人も震えている。

『今、ボクのこと女つて言つたよね。』

「ボクつて言つてたけどどう見たつて女じやん。」

「（あの人かわいそつだなー）」

『善吉と阿久根先輩、そんな他人事のような考えはやめてください

いね。そもそもことつい殺つちやこますよ（笑）』

「「（すみませんでした。）」『

「あの娘、しゃべり方もむかつぐ。」

「「（だから、娘じやなくて子だつて。）」『

『一人とも、いふるやこよ（笑）』

「「（すみませんでした。）」『

「とにかくあの娘瀆そつ。一人とも・・・。」

『そこの金の亡者たち、作戦会議は終わつたかい？』

そう言つたとたん足元が崩れた。

『なるほどね。土台を倒せばボクが倒れるつて思ったのか。

甘い
甘い
四

「そんな事言つてももう終わりだから。」

『だから、そういう考えが甘いんだって。』

「ぐるぐる、剣道部！水の上に立つてこよー！や、田中一浮
いているーだつとおおおおーーっー？」

『めだかちゃんもこいつをつて立つんですよ。』

落ちるタイミングで、絶対防壁で空気を固めて足場を作つただけなんだよね。つといてもこれはチートか。

「あなた、何者なの？」

ボクはただの1年生ですよ。

「」れじゃー私たちの負けね。でも、あんたじゃ私たちの苦痛なんて分かるわけないんでしきうね。」

いや、分かるよ。

「え？」

『だから分かるつて。』

「偽善者、ふつてんじやないわよ。あんた達みたいに恵まれた環境で育つた人間に分かるわけないじゃない。」

『だまれ！…！』

つい反応してしまった。って、なんだか意識が・・・。

「おっと、危なかつたねー。表人格あいじつが怒るともう手に負えなくなるので。」

「お前、誰だ？」

「俺は、皆みな存知、二タ子樹にたごじゆだがなにか？」

「お前は、私たちの知っている樹ではないーー！」

「さすが、会長。俺はいつもの樹じゃないが、正真正銘二タ子樹にたごじゆだ。」

「まさか、お前、」

「察しがいいねー。そう俺はもう一人の二タ子樹だ。俗に言つ裏人格うりじゆつて奴さ。」

「…………裏人格？」「…………」

「皆さん、はもり過ぎだつて。あ、そつそつあいつけ本当にお前らの気持ちが分かるぜ。」

「そんなの嘘よー！貧しい生活でお父さんは蒸発し、お母さんは身体を壊した過去を持つ私の気持ちは、分かるわけないじゃない。」

「残念だが、それじゃーお前のほうが恵まれてるって言えるぜ。なにせ、あいつは2度売られてるからな。」

「それは、私も初耳だ。」

「一度目は、自分の両親に。2度目は病院に。」

「なによ、たかが売られたくらいで。」

「なら、お前は人体実験って知ってるか？24時間監視され、実験され、拳銃のためにその苦痛から俺まで作つて今を生きてるんだ。」

「それって。」

「表ざたにはなつてねーが、実際あるんだよ。だからあいつは人の苦痛には人一倍敏感なんだ。あと最後に言っておくがあいつの考えるお金よりも大事なものって何だと思つ？」

「やつぱり命？」

「俺ならそう答えるがあいつは違う。あいつが“友情”だ。」

「そんな、友情だなんて。」

「そんな風に思つてるのはお前だけだぜ。」

「え？」

「喜界島と金どつちが大事だ?」

「お前」

「ほらな、金なんてその程度のものだ。」

そういうて、俺は喜界島にキスをする。つて、あいつバランス崩
しゃがつて。仕方ない、

「おおおおおおおおおーーー」これはー両者同時に着水だあーつーー！」

「うんでもその前に。樹がいいこと言いながらちやつかり競泳部のハチマキ奪つてたね」

結果、
一位
二位
三位
四位

「そんなわけで先日イベントは成功に終わった。しかし私が学校行事において私財を投じたことについて批判が多かつたのも事実である」

「わすがに先生から叱られたしな」

「その通りだ。確かに公私混用はよくない！よつて今後そんなことのなによつて生徒会にお金の専門家を雇い入れることにした紹介しよう。」

そう言つと入つて来たのは

「これから会計職を任せると喜界島同級生だ！競泳部からのレンタルなので大切に扱つよ！」

「荒稼ぎに来ました。無駄遣いしたら売り飛ばしますからそのつもりで…」

「これには善吉や阿久根もビックリだ。

「ちなみにレンタル料は1日280円だ！」

「（原作より安くなつてゐる）。これじゃ一す 屋の牛丼と一緒にやん。ところで、なんで喜界島さんはボクの方を見て、顔を赤くす

るのだろう？あの二人のボクの方を見て、ニヤ付いてるし。よし、あとで拷問だ。^{じじょうあくもん}」

その後、ボクは大事なセカンドキスを無意識の間に失ったことを知つたのは言うまでもないだろう。

金で買えないもの?それは、命と友情だ 下(後書き)

作者「やつと終わつた」。つて「一人とも?」

裏「金で命は買えないぜ。」

表「友情だつて買えないよ。」

裏「友情なんてそんな薄っぺらいものにすがつていろよ!じゃまだ
まだだな。」

表「友達なんていないくせに。」

裏「友達は裏切るためにあるんだ。」

表「そんな事いって本当ほしこくせに。」

作者「あのー二人とも。」

表&裏「うるさい(うるせえ)」「

作者「すみませんでした。」

服の乱れは心の乱れでなく、乱れるのは自分のセンス故だ---。(前書き)

学校の制服は厳しきですねー。正直めんどくさい。

これ本音

服の乱れは心の乱れでなく、乱れるのは自分のセンス故だ！！

水中運動会も終わり、最近生徒会は普通である。まーめだかちゃんがいる時点で普通ではないが。あつたことといえば、善吉が、喜界じゅ

「言わなくていいから。」

善吉は、あの一件でトライアゴになつたらしい。めだかちゃんは、見てくれば貴界島さんは見るなら金取るか・・・。ボクだったら、つてボクは男だった。そういえば、運動会の後、剣道部に空飛ぶ美少女がいると噂になつている。でも、剣道部に女子部員はないから誰なんだろ？！

と言つわけど、今ボクは校門の前だ。そういうえば、このころ風紀眼を持つていてる鬼瀬さんの登場か・・・って言つてゐそばから鬼瀬さん登場！！

「校則違反です！！」

また、犠牲者？が・・・。

「あなたがたの外装には正しい部分がひとつあります。服装の乱れは心の乱れ。よつてあなたがたの心は乱れきつております！！」

風紀委員会所属のこの鬼瀬針金の目が黒いうちは。あなたがたのような風体の生徒は一步たりとも校門を通らせませんよー！」

つまり、鬼瀬さんの目が白くなれば許してもらえるのかー。（絶対ないな。）

鬼瀬の言葉に止められてる生徒せいとからは、「だつて・・・や」「あれだしな・・・」などと言つた言葉が聞こえてくるだけだった。

「なんですかその態度はー口答えは許しませんよー」

ボクの意見としては、口答えでなく言い訳だと思つが・・・。つまり、関係ない、関係ない、僕の服装も関係ない。

「いや風紀委員さん、そりゃあんたの言つ通りかもしんねーけど、だつたらあいつはびっくりするんだ?」

「あいつ?」

誰だ、あいつって?嘘であると信じているが。つと思つたら違う人か。もしもボクだつたら密告者を殺あやめてしまつてしまつた。

ちなみに、あいつとはめだかちゃんのことである。これには魂が飛び出るほど驚いたのか、鬼瀬さんは停止してしまった。

「ボクは、部外者だ。」

そう言つと停止している鬼瀬を無視してゾロゾロと学園に歩みだした。いつまでフリーズしてるのだろう?

「一体！何を考えているのですか生徒会は……」

フリーズ状態（約1時間）から、復活した鬼瀬さんはすぐに生徒会室に怒鳴りこみに来ていた。

「生徒の範たるべき生徒会役員が一体どんな魂胆があつて率先して風紀を乱しやがるのです？」

鬼瀬の怒鳴りに善吉と阿久根はやべーという感じで、めだかはどう吹く風でもがなは我関せず、ボクは部外者を装つた。（実際部外者だが）

「人吉善吉くん！それに一タ子樹君！どうして制服の下にジャージを着ているのですか！まさかオシャレのつもりじゃないですね！」？

「いや・・・、そもそも時代が俺達に追いついてきたかと・・・」

「断固して違います。」

この瞬間、ガラスの割れたような音が2回鳴った。

「阿久根高貴さん！たとえあなたがエルヴィス・プレスリーの熱烈なファンだったとしてもその大胆さはありません！！」

簡単に胸元を露出させている服装。でも、阿久根先輩はエルヴィス・プレスリーの熱烈なファンではなく、めだかちゃんの熱烈なファンであるから許されるであろう。

「誰のファンでも許されません。」

「のの人にも心読まれた。」の世界では読心術が当たり前なのか。
恐るべし箱庭学園生。

「そしてそこのソロバン弾いてる人！もとい喜界島もがなさん！
あなたは何を『あたしには関係ない』みたいに構えてるのですか！？」

「だつてあたしには関係ないもん。制服改造なんてしてないしスカートだつてフツーの長さだよ？」

喜界島さんの通り見た目は何にも問題ないのだが、

「はーあーーーん？そんなこと言つても私の目は誤魔化されませんよー。」

そう言いながら、鬼瀬さんは持つていた手錠を喜界島さんに投げつける。すると、見事水着が見えてきた。

「ほおーらー！あなたが中に水着を着込んでいることくらい私の風紀眼にはお見通しなんですー！」

ナルトの『輪眼かつて言つて』

そしてしばらくなつと善吉とボクは普通の生徒会の服装に戻り、もがなは水着を脱いだ。しかし力が出ないらしくふるふる震える。喜界島さんは、水中戦は、最強だが水着がないとダメ人間らしい。

「すみません鬼瀬さん、水着だけになるとこいつのはダメですか？」

「ダメに決まつてゐるでしょ」「…？」

「瀧清は終わつたか？」

「こんな事をやつてると見計らつたのよつてにめだかちゃんが話し掛けってきた。

「まあその辺で許してやつてくれ鬼瀬同級生、皆決して悪気があつたわけではないのだ。」

「あ、いえ、生徒会長…こちらこそ職務中にお邪魔いたしました。それではこれで失礼させていただします！」

「うむ、委員長によろしくな…」

そう言つと鬼瀬はすたすた歩いて行つたがすぐに戻つてきた

「つてそんなわけないでしょーつ…！」

そういうめだかちゃんの机を殴り粉碎させた。

ナイスノリ突つ込み。そして怖いよ、鬼瀬さん。

「一番問題なのはあなたです生徒会長。その恥ずかしい制服以上の悪気がこの世のどこにありますか！」

「恥ずかしい？ふむ、また随分と的外れなことを言われてしまつたものだ。」

ボクらは潔いのに、ここまで掛け合つとはすがめだかちゃん。

「この黒神めだか。己が肉体に恥じる箇所などひとつもない。」

そして、一人とも話しかみ合わせて……

めがががいつものように凜として眞づが全然話はかみ合つてなかつた。

「肉体は恥じなくとも服装は恥じてください。そんな胸元を露出させてしまつたない。」

「これは胸元を露出しておるのではない胸元以外を隠しているのだ。」

「基本全裸なんですか！？はあはあ、もう

ついに呆れられた。まー仕方ないか。

「今回はこれで帰ります……、とはなりませんよ！だいたい一番の問題はあなたです！その服装を真似する生徒が現れたらどうするんですか？」

「真似？させればよいではないか。むしろ私は任期中には女子の制服をこれで統一しようと考えておるが。」

「とんでもねえこと企んでやがります？」

「うーん、さすがのめだかちゃんもちょっと押されてますね」

「フツ、虫だな人吉クンこれはいつものパターンじゃないか。これからめだかさんの名ゼリフが出てくるんだって！鬼瀬さんはもうより俺達でさえ唸らされてしまつ名言がな。」

「（いや、これはダメなパターンだと思いますが……）

「とにかく着替えてください黒神さん！それとも着替えたくない合理的な理由もあるんですか！」

「…………とにかく嫌だ！」

（このキッパリ言つためだかの言葉に鬼瀬は絶句、後ろのボクらは壁に手をついていた。それから破壊音が響いた。鬼瀬さんにとって手錠がメリケンサックらしい。つと言うより生徒を取り締まる人が生徒の迷惑をかけるなど、全くひどい話だ。（生徒の模範となる人がこれだと言つことも問題だが。）

やつとこのじゅが、生徒会／S風紀委員会の序幕なのだと想つ。

最後に鬼瀬さん、手錠はメリケンサックでなくこうやって人を捕

あくまで元気なだけだよ。

服の乱れは心の乱れでなく、乱れるのは自分のセンス故だ---（後書き）

レバテイ・ヒトヨウのは次回に繋げるためです。わたり・・・

手錠の取り扱いには注意するよつてーー！（前書き）

作者「テストで投稿が遅れました。本当にすいません。」

樹「結果は・・・ドンマイ！」

作者「うるさい、この女装の達人め。」

樹『何それ、太鼓の達人みたいだね。一緒に殺^{あそ}びましょうか。』

作者「バイバイ、俺」

手錠の取り扱いには注意あるよつてー！

第25部を見てくれた方の中に気付いた人もいるだろ？。そう、ボクは今手錠により拘束されているのだ。なぜこうなったのかと言うと

（回想）

「今日は、鬼瀬同級生からの呼び出しがあった。場所は旧プールだそうだ。」

「また、服装の取り締まりか。」 善吉

「また、プールか。」 阿久根先輩

「また、鬼瀬さんか。」 ボク

「「「鬼瀬さん（同級生）に失礼だぞ。」「「めだかちゃん＆善吉＆阿久根先輩

「だつて服のセンスが分かつてないじゃないですか。」 ボク

「確かに。」 善吉

「ホントあの女むかつく。」 もがな

「しかも、『手錠メリケンの鬼瀬』って呼ばれているらしいですよ。」ボク

「ホントあの女むかつく。」もがな

（十分後）

「しかも、委員長自らスカウトしたという本年度風紀委員会の肝入りですよ。」ボク

「ホントあの女むかつく。」もがな

（さらに十分後）

「さらに、風紀のためにには暴力も辞さない強引なスタイルで彼女が取り締まりを行うようになつて以来、校則違反者は激減したと言いますからね。」ボク

「ホントあの女むかつく。」もがな

「……」他の三人

「そろばく」「ガチャツ」「？？」

「樹、貴様を『鬼瀬同級生への暴言、及び我々三人を一十一分三十七秒空氣化させた罪』により逮捕する。」

「「異議なし。」」

「知らないよ。しかもそんな罪ないでしょーーー！」

「追加『う罪』^{デビ}。」

「うまいー一座布団一枚。・・・じゃなくてめだかちゃん、キャラ
変わり過ぎだから。っていうか、この手錠、鬼瀬さんのじゃん！ーーー！」

「借りた。」

「こりは、借りパクって書ひ、立派な犯罪だからね。」

「まーよーではないか。それでは、旧プールに移動するが。」

「えつと、ボクはどうなるの？..」

「もちがいのままで。」

～回想終～

つて、ボク悲しすぎるでしょーーーしかし、ここは田を黙つとして
やうう。うん、ボクつて大人だなー。

「樹は、まだまだ子供だぞ。」

そこでした。この世界では読心術が当たり前でしたね。もー怖い怖い。

そして、ボクらは旧プールに到着！…そして鬼瀬さんも登場！！
例の屋内プールが完成して以来こちらの古いプールは放置状態
だったがゆえにすっかり雨水がたまってしまっておるな。しかし、
さつきの今で私をこんなところに呼び出したのはどうしてつもりだ、
鬼瀬同級生？』

「ちなみに、この手錠は……」

「言つておくがこの制服を正す気はまったくないぞ。』

「え……あ、うん。』

「完全無視……！」

めだかちゃんが先に釘をさすと鬼瀬はドキッとしていた。

「えー実はですね、田安箱の投書が何かの手違いでつこせつき風
紀委員会に届きましたそれをうつかり読んでしまったところ匿名希望
の方がとても大切なものをなぜかこのプールに落としてしまった
そうでそれを探して欲しいらしいです。出来る限り早く見つけないと
水に解けちゃつたりするかもしねないので学園を愛する仲間として
この一刻を争う状態をなんとしても黒神さんにお伝えしなければ
と義侠心にかられたのです……！」

「（まことに、噴出しそう。なんと見え透いた嘘を付いてんだろ？）笑うなボク、これは鬼瀬さんの作戦であり演技なんだ。」

ちなみに作戦とは・・・

偽りの投書でめだかちゃんを旧プールに呼び出して作業させるために水着に着替えさせ、その隙に鬼瀬さんが通常デザインの制服と取り替えるというもの。にしても鬼瀬さんの演技下手すぎでしょ。

「わあ私にできる」とはいっておらず。どうなさりますか、黒神さん？」

「ふむ、よく分からんがまあよく分かつた。」

そう言つて扇子を閉じ、鬼瀬さんの思惑どおり着替えに

「それでは早速日安箱への投書に基づき生徒会を執行する――！」

行かなく制服のまま汚れた水の張つたプールに飛び込んだ。・・・
・・な、なんでボクまで一緒に？？しかも、今ボクは手錠のせいで手は後ろで動かせない状況なのに。

これには鬼瀬さんはビックリし、口が全開まで開けている。

これにはボクもビックリし、口が全開まで開いている。（否、水中なので正式には開けたいだけ。）

「な、何をやつてるんですか黒神さん！？」

「もちろん探し物だが。」

めだかちゃんに対して必死になつて言ひ鬼瀬さんだつためだかちゃんは不思議そつに鬼瀬さんを見た。（ボクはいま水中なので、原作知識より判断。）

「じゃなくて服。 そんな汚い水に浸かつたら服がダメになつちやうじやないですか。」

「それがどうした？」この一刻を争う状況で訳のわからん事を言つでない。乱れようが汚れようがたかが服だらうが。」

あたが 恰も当然といづばかりのめだかちゃんに鬼瀬さんは思わず呆然としてしまつた。

「おつとそう言えば落とし物が何なのか聞いてなかつたな。 鬼瀬同級生、大切なものは何なのだ？」

そう聞かれ、ハツとなつた鬼瀬は下を向き歯を食いしばると一
ルに飛び込んだ

「・・・・・私の良心。おかげさまでもう見つかりました。」

「・・・・・そつか。水に溶ける前に見つかってよかつたな。」

こうして今回の騒動は終結した。なんていい終わり方なんだ。ボクも見たかった。

「つて言つたか、前々から思つてたんですけどこの手錠、重すぎでしょ！！」

「ええええええっ！？黒神さん、スペアの制服着も持つてるんですか！？」

「なんだ貴様はスペアを持っておらんかったのか？では明日からどうするつもりだったのだ？」

「えーとボクもどうしてくれるんですか？」

「なんだ樹？まさかこのプールの中を私一人で探させるつもりだったのか？」

「つと言つたか、一人で見つけたじゃないですか。」

「まあ安心しろ鬼瀬同級生。私は困っている者を決して見捨てたりしないぞ。」

「またも完全無視！？」

「大丈夫だ、樹の！」とも手は打つてある。」

そして次の日、校門の前は昨日以上に騒がしく違反者でないものまで集まっていた。

その理由は・・・

いつもの通り鬼瀬さんが取り締まりしているのだがその格好がなんとめだかちゃんの制服を着ていたのだ。本人はとても恥ずかしそうにしていた。

そしてボクはといつと・・・

「畜生ー・樹のやつ。」

「なんで朝っぱらから善吉は泣いてんの?」

「死んじまつた。」

「善吉、今日はエイプリルフールじゃないよ」

「昨日旧プールに入つたつきり見てないんだ。」

「昨日の事故つて樹のことだったんだ。」

「俺を置いて死ぬなよな、樹。」

「誰が死んだって?」

「い、樹ーー!んなわけないか。」

「いや、ボクは正真正銘一タ子樹だからね。」

「じゃあ、なんでその服装なんだ?」

「昨日、濡れたからめだかちゃんに今日だけ貸してもらつてるんだ。」

「あひやひやひやひや 樹、その服装似合つてゐる」

「今日、めだかちゃんにも言われた……」

「樹、大丈夫だ。お前なら絶対に女装してもばれないぞ。」

『それ、ほめ言葉のつもつ・・・・』

「いや、これはその『言い訳するんだ。』やめる――――――。」

あひやひやひやひや
樹サイコー

「この田、昨日の事件の他に、謎の転校生（女子）と死んだ少年の亡靈が出ると言う噂話が広がった。

『女子の転校生って誰かな?』

「たぶん、その服を着たお前のことだと思つぜ。」

『あれ？ストレス発散機つて、しゃべるのかなー？』

「バイバイ、俺。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6296x/>

異常で過負荷な臆病者

2011年11月21日16時16分発行